

小谷部全一郎資料の整理

葛西 賢太

1. はじめに

米国エール大学などで神学を学んだ、小谷部全一郎(1867-1941)という著述家がいる。小谷部は牧師としても活動していたのだが、それよりもむしろ彼の所説——源義経が敗退を装い生き延びて大陸に渡り元朝を建てたチンギス・ハーンになったとする著作『成吉思汗ハ源義経也』や、日本人の祖先がユダヤ人であると提唱した著作『日本及日本國民之起原』——によって、奇説あるいは偽史言説の発信者のひとり、として紹介されることが多い。この逸話は、坂口安吾(1906-1955)⁽¹⁾の小説「風博士」の材料ともなっている。いっぽう彼は、米国留学では北米先住民やアフリカ系アメリカ人のための教育システムを学び、アイヌの子弟教育にも尽力しているが、このことはそれほど強調されることはない。

筆者はこの小谷部についての若干の資料を親族から引き継いだ⁽²⁾。資料は多くはないが親族でなくては得られないものが含まれていて、小谷部の仕事の部分ではなく全体像をつかみたいと考えた。たとえば、義経や日ユ同祖論の起源をめぐる所説は、彼のアイヌへの関心と切り離しては論じがたいものと筆者には思われたからだ。『年報』読者にとっての煩瑣を怖れずその際の留意点を挙げるなら、第一に、日ユ同祖論や義経チンギス・ハーン説の印象が強いため、それ以外の仕事も確認して、小谷部の仕事を全体として捉えること、第二に、小谷部自身の記録だけでなく、外部の公的な記録も参照すること、第三に、先行研究も参照しつつ、小谷部が語っていないことも確認すること、第四に、小谷部を同時代や関心を共有する他の人物と比較する視点をもつこと、という四点を心において資料を確認していった。小谷部の所説の真偽をあらためること、などは目的としていない。

筆者は近代日本の人物研究を専門とする者ではないが、今回の経験を共有することで、小谷部の仕事に関心をもつ人にとっても、また関連分野の研究者にとっても、なにか資するものがあればと念じて、研究ノートという形で共有したい。

2. 自伝的な著作

小谷部は多くの著作をものしているが、そのうち二冊は、自伝的性格が強い。その二冊、そして小谷部からの書簡を二箇所ので読むことができるので、それらをもとに、彼がどのような人生をたどったどのような人物であるかを確認したい。

2-1. 『ジャパニーズ・ロビンソン・クルーソー』

彼の前半生を書いた英語の自伝 *A Japanese Robinson Crusoe* (生田俊彦による邦訳『ジャパニー

ズ・ロビンソン・クルーソー』あり)は、彼の生い立ちとアイヌとの出会い、米国への私費留学について述べた冒険譚である。この自伝からは、彼が渡米に先だってアイヌの「救済」とアイヌの子弟教育に強い関心をもっていたことがうかがわれるが、同時に米国留学中の彼の立ち位置も示される。小谷部という人物を知るために、この前半生記の流れを確認しよう。

秋田県に生まれた彼の母は早世し、父は学問に夢中で子をおいて上京してしまったため、彼は祖母、ついで叔母に育てられた。のちに再会した父は全一郎に学問の手ほどきをするが、将来設計で父と意見対立し、家を出て北海道に渡りアイヌの人々に世話になることになる。当時アイヌへの教育伝道を行っていた聖公会のジョン・パチェラー(1854-1944)の活動を聞いて全一郎は感銘を受け、自分も渡米してキリスト教について学び伝道者になりたいと思うようになる。資金のないまま複数回の渡航を試みて挫折した後、船員として働きながらの渡航の機会を得てニューヨークに来ることができた。

憧れの国アメリカでは、すぐに、釣り銭をごまかされたり人種差別をされたりという出来事が重なり、アメリカは信心深い善人に満ちた国ではないと失望する。だが彼の向学心を汲んで支援する人たちも多くいた。そのような人たちの助けを得て、また期待に応える努力をしながら、彼はまずヴァージニアのハンプトン農工実業学校(現在のハンプトン大学)に入学し、ついでワシントンDCのハワード大学に進み、神学などを学ぶ。ハワード大学学長ランキン夫妻との親交の中で志の高い教師たちと出会い、推薦を受けてエール大に進学することを得、ハワイで牧師となる。父をハワイに呼び寄せたいと思うが、まもなく父は他界してしまう。そのために、エール大に戻って大学院で神学を学び直した上で、日本での伝道を行うため、帰国を決意する。ここまでで *A Japanese Robinson Crusoe* は終わっている。

本書は小谷部が経験した好奇心をくすぐられるようなエピソードであふれている。キリスト教を求めての冒険というのはクリスチャン聴衆の好奇心を刺激したであろうし、それによって数多くの講演の謝礼や寄付を小谷部が受けていたことが推測できる。が、いっぽうで、本書に言及されていないこともある。たとえば、最初に入学したハンプトン農工実業学校とハワード大学は、ともに、南北戦争と奴隷解放宣言を経て解放されたアフリカ系アメリカ人の教育を目指して建学された大学⁽³⁾なのだが、そのことは触れられていない。相当数いたであろう「有色人種」である学友たちのことも語られない。また小谷部の語りは、「有色人種」である自身が、努力して「白人」の仲間“*Japanese Yankee*”と見られること、彼自身が「白人」に同一化することを望んでいるかのように読める(Robinson and Yaguchi 2009:8-9;20-21)。

帰国のあとの小谷部の人生後半は、彼が妻の死後にその生き方を讃えた著作『純日本的婦人の倂』を通してたどることができる。

2-2. 『純日本婦人の倂』

全一郎の最初の妻である菊代(旧姓石川)を追悼し彼女の生き方を讃えた一書であるが、小谷部自身が帰国後に経験した後半生をふりかえる資料として読める。

米国から帰国して東京での住まいを探したが、当時の日本家屋の狭小さに耐えず、「日比谷公園近くに、旭館という高等下宿」に「一ヶ月五十圓」の下宿料を払って、小谷部は暮らしていた。このことから、彼は米国時代に講演料などを通してまとまったお金を得ていたことが推測できる。エー

ル大時代の友人である牧師が彼の住まいを訪問して、“議会の時期に地方から上京する代議士が泊まるような不経済な宿”と評し、結婚して持ち家に住むべきだと勧められた。小谷部にはその気がないので「氏族の家に生まれて高等教育を受け、年頃になりたるときに生家は没落し、家もなく所持品もなく、しかも温順にして貞淑、守操堅固なる人」がいれば会ってもよい、という条件を課したら、元仙台藩士の娘であり条件を満たす石川菊代を紹介され、結婚することになったという。なお菊代の姉の梅代は、儒教的なキリスト教として知られる「道会」の創設者・松村介石の妻になっている。

その後小谷部は、アメリカン・ボードから派遣された宣教師ダニエル・クロスビー・グリーン(1843-1913)の下に、1893年に創立されたばかりの横浜組合基督教会の第2代牧師として赴任した。だが「月給とは名のみにて米代にも足らず」、いっぽうで本国から高給を受けるグリーンとの格差に不満を覚えていたことを小谷部は語っている。説教中に靈感あつて「洋服を身に纏いたる日本の神主」のようなことをしている自分は、むしろこの洋服を脱ぎ、「神道の神職となりて、済世救民の天業に従事する」方がよい、と思い立って、教会を辞めたという。キリスト教から神道への回心・改宗のようにも、教会牧師としての窮状に辟易したようにも読める。彼は神道界との接点を模索するが、一部の支持者をのぞき、「異教者」として大半の者に毛嫌いもされて、神道を学ぶのは時期尚早とあきらめざるをえなかったという(小谷部 1938:1-13)。

ちょうどその頃(1899年)、アイヌに土地を供与して定着させ農耕民とすることを意図した「北海道旧土人保護法」が成立した。この「保護法」は、北米先住民保護と支援のために施行された米国のドーズ法を参考に、アイヌに土地を供与して保護と支援を図るものであり(富田 1989)、この法律をハワイ公使の島村久や米公使の星亨に提言するかたちで小谷部は寄与していたらしい(土井 2005:128-133)。小谷部はこの「保護法」成立を機に、アイヌ子弟教育事業の意義を要人に説いて支援を約束させ、北海道旧土人教育会を設立し、初等教育と実業学校をそなえた虻田学園を開学するにいたった。だが虻田学園の資金繰りと人間関係に行き詰まって体調を崩し、数年にして失意のうちに東京に戻ることにになり、学園は官立に移行するが入学者なく閉校にいたる。

その後、全一郎は、國學院大學・皇典講究所講師を数年間⁽⁴⁾つとめ、また著述家として活動する。チンギス・ハーンと義経が同一人物である物証を求めた実地踏査のために、陸軍の通訳としての試験に応募し、合格して大陸に渡り、その「実地踏査」を踏まえて『成吉思汗ハ源義経也』を刊行する。同書は強い反響と批判をとともに得て版と増補を重ね、全一郎は講演なども重ねるようになる。菊代は家庭・家計を支えるだけでなく、全一郎の原稿の清書などもしたらしい。

本書はこのような全一郎の波瀾万丈な活動を支え続けた妻の菊代を讃え、彼女の気丈な臨終にいたるまでが描かれている⁽⁵⁾。だが、満州で義経の墓が発見されたといった新聞記事引用にも本書の紙数が割かれており(小谷部 1938:38-69)、純日本的な婦人としての妻・菊代の紹介だけではない全一郎の主張が見えてしまう。そして、小谷部自身は本書で語っていないが、彼の在任中の1899(明治32)年に、横浜組合基督教会は、横浜伊勢佐木町の大火に見舞われて焼け落ちている。教会は借家にうつされるが、“病氣”で小谷部は去り、後任の平田義道牧師が着任するまでは無牧時代であったという(日本基督教団紅葉坂教会百年史編集委員会 1993:13-15;124-125)(横浜プロテスタント誌研究会編 1992:92)。小谷部が牧師を辞した理由が、この「靈感」か、教会焼失か、あるいは「北海道旧土人保護法」成立のいずれかが断定できないが、教会焼失が彼にとっても教会員にとっても痛

恨事であったことはいうまでもないだろうし、その教会を置いて牧師を辞さねばならなかったことは、小谷部にとっては胸も耳も痛むことだっただろうと想像される。

2-3. 小谷部の書簡

自伝的な性格をもった二つの著作とあわせ、小谷部が自身を語る資料がまとまったかたちで残されているのが、小谷部自身が発信した手紙である。小谷部が母校のハンプトン農工実業学校に送った複数の手紙、ハワード大学に送った手紙、小谷部のもとで虻田学園の教師をつとめた吉田巖(1882-1963)あてに送られた小谷部からの手紙が残されている。それらから三つだけ取り上げよう。

ハンプトン農工実業学校への 1907 年 2 月 25 日付の手紙は、北海道の虻田学園から出されている。

親愛なるフリッセル博士

温かいお手紙ありがとうございます。お忘れになられたかも知れませんが、私は 1890 年のクリスマスの朝に大学のチャペルであなたに洗礼して頂いた一人です。いまにいたるまで私はキリスト者であります。ここには教会がないのですが、心の中で、私はキリストの弟子です。本土を離れた島で私が苦心惨憺しながら虐げられて貧しい人々の為に働いているのを、神はご覧になっておられるでしょう。

現在私は忙しく、長い文章を書く余裕也没有ありません。

私は *Southern Workman* 誌を購読したいのですが、ここ離島では、通貨を換金するすべも送金するすべもありません。あなたが何か *Southern Workman* 誌に感謝するすべをお持ちであるとうれしいのですが。

あなた方皆様に感謝します。祈りをこめて

小谷部

The Southern Workman 誌は、1881 年から 1929 年まで刊行されたハンプトン農工実業学校の同窓会誌で、アフリカ系アメリカ人教育の分析と実践をとおして人種を超えた相互理解を強調している。同窓会誌の購読費である米ドルを手配できない弁明とともに数行、小谷部の近況報告がある。ハンプトンで教わったように、自分も日本でアイヌという先住民の教育に奉仕していて、経済的に苦勞しながらがんばっている、という趣旨である。

もう少しのちの同様の記述が、エール大神学校の 1895 年入学同期生の同窓会報(1915 年)⁶⁾にもある。

親愛なるブラザー・ジョンソンへ

日本に戻ってから、私は北日本の古代人種であるアイヌに深い関心をもってきました。彼らを支援するために何でもしたいと思い、家族ともども北海道に移住して彼らとともに暮らし、彼らのために学校を設立しました。私は身体を壊してしまい、その仕事を、村と、私が訓練した教師たちに託し、治療のために気候穏やかな東京に戻ってきました。北海道を辞したのは五年前です。私は健康を取り戻しました。私は天の父の名に従い、静かに信仰をもって、父のための働きを続

けています。

皆様によりしくお伝え下さい

小谷部全一郎

虻田学園の教師となった吉田巖は福島の相馬藩の出身で、二宮尊徳のひ孫にあたり、巖自身も儒教や社会貢献への関心が高かったという。実兄の影響から北海道でのアイヌ子弟教育にたずさわり、小谷部の誘いを受けて虻田学園に籍を移す。アイヌ子弟教育に貢献するとともに、帯広市史やアイヌ民謡・方言研究などの業績（東京人類学雑誌の 51 の論文に加え、全部で 235 点のアイヌ研究）をとおして、アイヌ研究者としても教育者としても広く知られる。きわめて詳細な記録や日記が整理保管されていたので、それ自体が北海道民俗研究・アイヌ研究の資料『吉田巖資料集』として刊行されている。ここに小谷部から発信した書簡も含まれている。またそれに対する吉田巖の感想が日記に残されている。残されているのは小谷部から吉田への書簡であり、逆方向のそれはない。

吉田巖を教員として迎え、校長の小谷部は有力者からの支援を求めて奔走するが、それゆえに虻田学園を留守にする彼の行動や、有力者面会のための盛装が私腹を肥やしているのではないかという批判につながり、小谷部は心労のすえに身体を壊して東京に帰ってしまう。虻田学園は官立に移行するも定員満たされず、有珠山の噴火で生徒も教師も避難を余儀なくされ、閉校することになってしまう。

吉田は小谷部に敬意を払ってはいるが、小谷部が東京に退いてからも続く資金繰りをめぐるやりとりなどに、吉田が辟易させられていたことを記している。だが、アイヌ文化への関心、教育への志と信頼関係は、二人の生涯でずっと共有される。小谷部は日本人の起源をアイヌに求める自説を吉田に提案して意見を求めたりしているのである。以下の手紙は、1916（大正 5）年 6 月 28 日、吉田巖の結婚を祝って小谷部自身の経験から助言しつつ、アイヌ語が日本の地名に反映されていることを指摘したらしいやりとりである。

地名は殆ど全国を網羅致し、貴君の相違の点二三申し上げべく候。

薩摩 サツトマ 沼の渴きたる処

信濃 シンナヌ 水と鹿の多き土地

銚子 チオウシ 舟揚場

利根（川） タンネ 細長き川

伊吹山 エブイケ 花の山

磐梯山 ポンタイ 小さき木の森

アイヌの研究は今猶ほ旧の如く愉快……（帯広市教育委員会 1996a:41;1996b:55-58）

『吉田巖資料集』へのこの手紙には藤村久和が註を付して、上記の小谷部の理解はいくつかの思い違いを含んだものらしい。アイヌのことばの音韻に、小谷部は日本のさまざまな固有名詞の原型を見だして、アイヌとユダヤとを重ねるようになる。アイヌの独自性とはなにか？ アイヌと現日本人との共通点はなにか、違いはなにか？という関心を長く持ち続けていたと思われる。次節では小谷部の義経チングス・ハーン説や日ユ同祖論を扱うが、小谷部がアイヌへの語源的音韻

的関心をずっと持ち続けていることに注意して頂きたい。

3. 歴史と思想の主張

3-1. 『成吉思汗ハ源義経也』

『成吉思汗ハ源義経也』は、源頼朝の指示で命を終えたと装った源義経が、北海道を経て大陸に渡り、チンギス・ハーンとして元王朝を建てた、と主張するものである。『吾妻鏡』『玉葉』など鎌倉幕府の複数の公式史書とは異なり、たとえば水戸藩による『大日本史』などが義経北行伝説に言及をしていることを強調する。また、奥羽やアイヌに伝わる神格化された義経の伝説や、大陸にある「義経の遺跡」についても言及する。

『成吉思汗ハ源義経也』は、煩瑣な議論が続く、決して読みやすい本ではないが、主旨はそれほど複雑ではない。小谷部は「実地踏査」を行い、言語上・音韻上の類似を指摘し、また口碑・伝承を拾ってそれらを根拠とするとともに、義経のようなすぐれた武将がそもそもこのような形で死ぬわけがない、と主張しつづける。

版を重ねて評判になった『成吉思汗ハ源義経也』に対し、『中央史壇』誌が緊急特集企画として『成吉思汗ハ源義経ニアラズ』という学者たちの反駁コメント集を刊行する。おそらく学者たちは時間的な余裕のない寄稿を求められ困惑していたことがうかがえ、一部を除いては小谷部の『成吉思汗ハ源義経也』に目も通さずに切り捨てていて、それが小谷部を支持する書評などを出させる結果になった（小谷部 1930:201-203）。「あの義経がこんな形で死ぬわけがない」という小谷部の思い入れに対して、正面から学問的な反論をぶつける、などという企画は、最初からすれ違いが約束されたようなものだ。

とはいえ、この緊急特集の中で、アイヌ研究で知られる金田一京助の反論は小谷部の論に向き合ったものである。帝大学生時代に虻田学園の小谷部を訪問し、以来、小谷部を直接知る金田一は、共感的な立場を保ちつつも、本書は英雄を死なせたくないという小谷部の願望の反映であり学術的には支持しがたい、と論じる⁷⁾。小谷部の願望の反映、という評は、小谷部を動かすモチベーションを的確に表現していると感じられる。

『中央史壇』に対し、小谷部は『成吉思汗ハ源義経也・著作の動機と反論』（小谷部 1930）という増補版を刊行し、精力的に応答している。源義経が北海道を経て渡航し後にチンギス・ハーンになったという説は、小谷部が最初に唱えたものではない。末松謙澄（1855-1920）がオックスフォード大に出した卒業論文の邦訳『義経再興記』を小谷部は読んでいたのではないかと、という問いには、若き日に貧しく購入かなわず立ち読みをして書名を失念していたが確かに読んでいた（1930:227-229）、と答える。また、「軍関係者から資金を得たプロパガンダではないのか」という批判に対しては、全一郎は強く否定し、52才で陸軍省通訳の試験に合格してのシベリア調査であることをとりあげ、自前の努力で現地踏査したことを強調し、シベリアの実地踏査まで行い口碑を確かめたわれと、机上の学問にしがみついている学者どもとは、はたしてどちらが正しいのか、と反撃する（1930:399）。

小谷部の所説の真偽を論じることではなく、彼の仕事の全体像を捉えることが拙論の目的なので、本書に対する反響について補っておきたい。『成吉思汗ハ源義経也』は、発売後二ヶ月のうちに10版を重ね一万部が発行されていたという（小谷部 1930:222）。小谷部が個人的に保管していた『成

吉思汗ハ源義経也』の複数の版では、複数の陸軍関係読者からの熱のこもった著者への手紙が貼付されたり、戦地で没した軍人が持っていたなど、小谷部の経緯説明が書き添えられたりしている。

たびたびの本書の増補と、そこに追加して載せられる「読者の声」（反論も含まれる）の読者のエピソード、また彼が講演などで語る読者とのエピソード（小谷部 1933）を見ると、本書は小谷部の著作ではあるが、読者の有形無形の「支援」や「情報提供」に押し上げられ、読者たちのものと化していった過程を読むことができる。ほぼ倍の厚みとなる『著作の動機と反論』増補分のうち、頁数の半分は小谷部の論、半分は読者の声である。読者は小谷部の人生に介入する。例を挙げれば、平泉の義経祭典に小谷部が臨もうとしたところ訪問者があり、北京郊外にチンギス・ハーンとゆかりのある平泉という場所があり増補の折にはこの話も掲載してほしいと申し入れる云々（小谷部 1933:27-29）、といったように。石川が「興亜国民版」を吟味して示したように、読者の声を集めることにより、読者も満州進出という国策を支持しているように喧伝され、期待に応えるとして増補されていく（石川 2017:158）⁽⁸⁾。

3-2. 『日本及日本國民之起原』

本書で小谷部が展開するのは、「神国」日本の国民はどこから来た（と考えるべき）か、日本人の「優秀さ」はどこに由来するかという所説である。日本人の起源は南洋やツングースにあるのではなく、アイヌを介してユダヤに遡る、と小谷部は主張する。小谷部は、中国や朝鮮半島からの由来や、南洋からの由来を意識しながら、音韻上の類似を取り上げる。たとえば、彼によれば、高天原（たかまがはら）とは、アーメニアのタガーマ州にあったハラという都を指す（小谷部 1929:329）、アイヌは旧約聖書のヤコブの兄エサウの末裔であり、エサウがなまって蝦夷になった（1929:54-55,84）、という風である。旧約聖書に語られるイスラエル部族の名称や語彙や宗教文化風俗習慣が現在のアイヌや日本に引き継がれており、それゆえ、ユダヤ人はアイヌを介して日本にいたっており、それがユダヤ人同様に日本人が「優秀」であることの理由であるとする。

本書は刊行後二ヶ月ほどの間に 7 版を重ねている。『日本及日本國民之起原』では、大陸進出を図る「大物」たる竹越與三郎の推薦のことばや頭山満の揮毫が掲載されていた。当時の日本が大陸進出する機運の中で本書が歓迎された状況があったことは確かと考えられる。音韻上の類似からの小谷部の推論にも抵抗があったが、一方、写真を含めた風俗習慣や宗教文化の比較は、ひとつの文化人類学的な著作として興味深くも読めた⁽¹⁰⁾。

3-4. 『アイヌ謎集』

米国の人類学者フレデリック・スタール Frederick Starr (1858-1933) が、1904 年のセントルイス万国博覧会のために収集したアイヌの人類学的資料から、十勝、胆振、白老、有珠でのアイヌの 72 のなぞなぞを列挙した小冊子として、1911（明治 44）年に小谷部が訳出したもの。

本書の自跋に、北海隠士と号した小谷部は「世界最古の遺民にして吾が国土の先住種族たるアイヌ」が「学術研究上至貴至重」であるが、「いまや僅々一万七千有余人」になってしまっていると嘆き、「その風俗言語口碑等を録して国家後世に保存すべきは吾が国民の義務の一端なりと信ず」と述べ、アイヌの文化を記録保存することを自らの仕事と位置づけている。

3-5. 『静御前之生涯』

『静御前之生涯』は、源義経の第二夫人であった静御前の生涯をたどり、踊りに長けた「白拍子」と呼ばれた彼女は、娼婦ではなく高貴な女性であった、という自説を小谷部が展開する。また静御前の墓（現在は茨城県古河市の光了寺にある）の場所と、遺品の鑑定をめぐる小谷部の考察を付している。本書は、いわば『成吉思汗ハ源義経也』からのスピニアウトであり、『義経』ほどの注目を得てはいないが、逆にそれゆえに金田一京助の指摘する“英雄不死伝説への願望”を議論抜きに拾い上げることができる。本書でも小谷部はさまざまな資料をとりあげて吟味するのだが、（源義経のようなすばらしい武将が愛した）静御前のようなすばらしい女性が、娼婦であるわけがない、という主張をここでも譲らないのである。

4. 小谷部全一郎とは何者か

この時代には複数の知識人がキリスト者として渡米して、キリスト教とともに米国の諸制度を学んでいる。そして、日本とは何か、日本人とは何か、また日本人ならではのキリスト教徒は何かを論じた英文著作を残している。たとえば、新渡戸稲造（1862-1933）や内村鑑三（1861-1930）や山室軍平（1872-1940）だ。彼らと小谷部を比較すると何が浮き彫りになるだろうか。

公務員・大学教員として公費で留学し、台湾経営も含めた重責をになって、教育者として為政者としてまた国際的な知識人として活躍した新渡戸は、日本的なサムライの倫理を紹介する『武士道』を著した。札幌農学校時代に受洗し、私費留学し、神学校で学んで帰国し、米社会への憧れと疑問を持ち続け、“Jesus と Japan の二つに奉仕する人生”を送った内村は、『代表的日本人』『余は如何にして基督教徒になりし乎』という、日本人論と自伝的な回心の記録を英文で刊行した。新渡戸と内村の著作は、海外の読者を仰ぎ見ながら日本的な宗教的倫理的価値観の意義をも主張するものとなっている。一方、小谷部の『ジャパニーズ・ロビンソン・クルーソー』は、興味深い冒険譚ではあるが、海外の読者の価値観を大きくゆすぶったり問いかけたりするものではなく、それを仰ぎ見ながら、“日本人でもよいキリスト教徒”あるいはよい“Japanese Yankee”になれるはずだと主張しているように思われる。

とくに苦学した内村との比較からは浮き彫りになることがいくつかある。内村と比較すると、小谷部は、義に生きるキリスト者への敬意は語っても、福音はほとんど説かない。小谷部は米国のキリスト者たちをその道徳性・利他的行為の有無を中心に評価するように見える。内村も米国のキリスト者たちの道徳性利他性を問題にもするのだが、聖書の一節から信仰的イマジネーションをたびたび湧き上がらせる『余は如何にして基督教徒になりし乎』と比べ、小谷部の『日本及日本國民之起原』は歴史と道徳の典拠として聖書を参照するのみにとどまっている。小谷部の書簡からも、信仰者としての自問よりも、信仰者としてアイヌ救済「事業」に神の意思を表したいということばが重ねられる。小谷部は理想と思えるキリスト教徒の奉仕のあり方を持ち、自分自身の生き方のモデルとしてきたものの、内村などと比べると、宗教者としてははるかに外向的といえるだろうか。

5. ひきついだ資料と小谷部についての研究

資料は小谷部の著書のうち、小谷部が個人的に保管用として手もとに置いた書き込みのあるものが数点、小谷部のハワード大およびエールの卒業証書があり、これらからは小谷部が学んだことが

確認できる。また小谷部が自らの先祖を調べた記録が数点。小谷部や家族の写真は簡単に整理されていただけの状態で、小谷部について問い合わせた人々に貸与した折におそらく失われたものが相当数あると思われる。これに、保管者である生田俊彦・正子夫妻が虻田学園について調査したときの写真なども混在していた。

小谷部の著作などには「ドクトル・オブ・フィロソフェー」と紹介されてあるが、卒業証書で確認できるのは、ハーワード大の卒業と、エールの卒業・神学大学院の在籍、修士号のハーワード大での取得である。博士号の学位記に相当するものは今回保管された中には見いだせなかった。

長谷川和美（2005）は、ハーワード大の最初の日本人卒業生である小谷部全一郎について詳細に調べ、特にアフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民教育に力を入れた同大学の理念を小谷部が精力的に体现しようとしたことを指摘している。彼女は後に、小谷部全一郎がこだわった義経北行伝説の戦間期日本における位置づけを研究し、また成果の一端をまとめている（Hasegawa2018）。

Robinson と矢口（2009）は、小谷部の前半生記である *A Japanese Robinson Crusoe* をハワイ大学出版会から再刊する際の introduction に、著作の内容と背景を詳細に吟味している。ふたりはたとえば、ハンプトン農工実業学校やハーワード大学はアフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民の教育に取り組んでいる学校なのに、小谷部は本書で両者の学友にほとんど言及していない不自然さを指摘する（2009:6-7）。本書の著述がもっぱら白人アングロサクソンのプロテスタントのアメリカ人にむいていたからではないか（2009:4-5）、小谷部は立派なクリスチャンになることによって、そのようなアメリカ人の一員に列したいと願ったのではないか（2009:3,20-21）と、二人は推察している。

小谷部全一郎はたくさんのことをやってきた。彼がもっとも専門的な教育を受けたのはキリスト教であったろうが、帰国後は教会を置いて北海道に渡ってしまう。母校には信仰を捨てていないと伝え続けるが、それは内村鑑三や新渡戸稲造、あるいは津田梅子のようなかたちでは結実しなかった。アイヌ子弟教育事業は 10 年間続かず中絶したが、吉田巖はその教育を別の地で引き継ぎ、金田一京助や吉田は小谷部よりも学術的に適したかたちで記録を残した。シベリアから帰国した 1922（大正 11）年ごろには、日本ユニテリアンの伝道を小谷部に依頼しようという話もあったらしいが実現しなかった（土屋博政 2005:169-170）。二つの著作は版を重ねたけれども、彼を押し上げた時代の波に、彼自身が飲まれることになった。全一郎のやってきたことを全体としてみて、あらためて、彼を突き動かしてきたものは何であったのかと、筆者は考えさせられている。

謝辞

この研究ノートは、2018 年 9 月 9 日、日本宗教学会学術大会にて口頭発表した「小谷部全一郎のアイデンティティー―日本、キリスト教、人物像」、およびそこでの討議や後日確認できた内容を踏まえ、資料を整理して確認できたことを文章にしたものである。舞鶴高専の吉永進氏からは多くのコメントをいただいた。吉永氏は、小谷部が「特殊な歴史」の著者として広く知られる人物であることを私に最初にご教示され、同時代のさまざまな人物との関係を調べてみる意義を具体的に示唆された。たとえば、小谷部の義妹の梅代は、新宿中村屋を夫とともに起こした相馬黒光や、千里眼研究を行った福来友吉の妻・町田辰などと、宮城女学校時代の学友であったことから、影響関係の検討対象に入ってくるものはないか。また、米国帰りのキリスト者で同様に日本人のユダヤ起源説を唱えた酒井勝軍の生涯や業績とつきあわせ、接点を探してみることを提案された。江戸時代から

の義経生存説を再び世に出した小谷部と酒井が、ともにキリスト者であることは、偶然の一致かも知れないがその事情を掘り下げて問うこともできるのではと。東北大の高橋原氏は、エール大の日本人留学生のリストの中に小谷部の名前を見だし、小谷部の生涯を追跡する最初のきっかけを作って下さった。米国先住民研究の専門家である富田虎男氏は、米国先住民の子弟教育との比較の観点から、小谷部全一郎のアイヌ子弟教育に関心をもたれ、生田夫妻に、ハンプトン農工実業学校での小谷部関係記録などを提供されている。日本基督教団紅葉坂教会および同教会の荒井仁牧師からは、同教会史における小谷部についての記載事項と、横浜伝道史の参考文献を教示頂き、小谷部のみならず伝道者たちの労苦に感銘を受けた。同志社女子大の長谷川和美氏からは、小谷部の米国での学びの詳細と、彼の所説が当時の日本人（日本人移民）とアフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民をつなぐグローバルな視点を示して頂き、継続調査の可能性を提案された。ハワイ大のグレッグ・ロビンソン氏と東京大の矢口祐人氏は小谷部自伝を詳細に吟味され、日本人移民に準じる道行きをたどった小谷部のまなざしについて多くの示唆をいただいた。立教大の石川巧氏からは偽史言説の一例として『成吉思汗ハ源義経也（興亜国民版）』を詳細に検討した資料を提供頂き、小谷部の著作に見られる増補の事情や増補内容を解説する重要性を教示頂いた。國學院大學の藤田大誠氏は、國學院大學及び皇典講究所での所属の詳細がどのように残されているかをご教示くださり、國學院校史研究をされている高野裕基氏につないで下さった。御礼を申し上げるべき人の多さは、小谷部の活動の成否のいかに越えて、活動が幅広かったことを示していると感じられる。

最後に、歴史の専門家ではないにもかかわらず小谷部全一郎についての資料を集め保管し、識者の教えを請い、彼の *A Japanese Robinson Crusoe* を邦訳・解説を付して残してくれた生田俊彦・正子夫妻に感謝する。

註

- (1) 小谷部全一郎が住んだ東京府荏原郡大井元芝町 849 番地（現在は品川区東大井）に、坂口安吾は数ヶ月だけ下宿していたことがわかっている。同番地内の別の家ではあったが、小谷部についてさまざまな噂を聞いていたであろう。
- (2) 著者は、妻の曾祖父としてたまたま小谷部全一郎という人物を知るにいたった。私が宗教の研究者であったことから、全一郎が使用していた東京の家と書斎を使わせてもらった。その時点で家や書斎には全一郎の資料はほとんど残っていなかった。全一郎関連資料を管理し、全一郎の半生記を邦訳した生田俊彦・正子夫妻が他界し、資料を翌 2018 年 4 月に受け取った。全一郎が参考資料として用いたものは相当量あったはずだが、それらの多くは本人および親族によって処分されたと思われる。また、既存の書籍にある写真が今回の資料の中にはなく、紛失されたか返却されていない可能性も考えられる。
- (3) ハンプトン農工実業学校とハーワード大学の両大学は、アフリカ系アメリカ人だけでなく北米先住民の教育にも取り組んだ時期があつて、小谷部が学んだのはちょうどその時期であつた。日本人とアフリカ系アメリカ人との交流史を研究した古川博巳と古川哲史によると、ハンプトン農工実業学校の多文化多民族教育は、津田梅子が 1900 年に女子英学塾（現在の津田塾大学）をひらく上でのモデルの一つともなっているという（古川・古川 2004:64-65）。現在も両

大学は学生の 9 割がアフリカ系アメリカ人で占められている。当時はともかく、現代の日本からの留学大学ランキングでは両大学ともなかなか入るのが難しいということだ。

- (4) 長谷川和美によると、小谷部が國學院大學・皇典講究所の講師として在籍した期間は、大正元（1912）年から大正 4（1915）年の間とみられる（Hasegawa2018:135）。國學院大學の年史などには小谷部の名前は見いだせなかったが、『皇典講究所会員名簿』『國學院大学院友会会員名簿』からは講師としての所属が確認できることを、藤田大誠から私信で教示された。
- (5) 1938（昭和 13）年 1 月に菊代が逝去した後、小谷部全一郎は旧土佐藩士齋藤久（歯学博士）の姉・齋藤梅子と 1938（昭和 13）年 6 月に再婚している。再婚の挨拶状や、1941（昭和 16）年 3 月に全一郎が他界したあとの梅子からの挨拶状などが吉田巖資料集に収められている（帯広市教育委員会 1996a:158-167;1996b:193-203）。
- (6) エールの 1895 年組の同期には社会主義者の片山潜もいて、カリフォルニア州サンフランシスコから、日本人労働者のための新聞や支援活動を行っていて、何度か逮捕されたり罰金刑を受けたりしているが、がんばっている、と、1915 年の同窓会報に返信している。
- (7) 金田一は、アイヌ研究を志した帝大学生時代に、虻田にてアイヌ子弟教育にたずさわっていた小谷部夫婦の元に一泊した時の経験を紹介している。そのおりに汗と泥にまみれて遊ぶ全一郎の子どもを見、また「小供が不便です。犠牲ですな」という全一郎のことばを聴いて心が動いたことも書き添えている。全一郎と研究について語らいつつ、全一郎の専門知識に感銘し、以後、先輩・友人として交流、生涯続く友情と敬意を抱いていると述べる。ときに娘の名前の「いさ子」にヘブライ語の「女性」という意味を読み込んだりする小谷部には懸念を抱きつつ、金田一自身の『義経入夷伝説考』などの著作を贈るなどの意見交換を継続していた。その上で、『成吉思汗ハ源義経也』の入念な現地踏査と徹底した資料収集には敬服、けれども史料批判が弱い、英雄不死伝説という結論ありきの現地踏査・資料収集ゆえに音韻類似上の思い込みを裏書きすることにしかならず、ゆえに根本的問題をはらんでいることを、きびしく指摘している（金田一 1925:21-35）。
- (8) 石川巧は、興亜国民版で増補された記述（読者の声や読者からの質問に対する小谷部の応答など）を中心に言説分析をし、「丹念なフィールドワークによって人々の口承、遺跡、言語の痕跡などを採取することの重要性を訴える小谷部の方法が、結果的にアカデミズムとは違った角度からそこに生きる人々の埋もれた記憶を掘り起こしていること、同書がベストセラーになった背景に大正から昭和における民間伝承研究の普及」（と民間伝承の再評価）があることを示し、小谷部の主張の「学問的」信憑性とはまったく別に大衆を引きつけた事情を検討している（石川 2017:158）。小谷部は机上の論理に依る学者を批判し、国家権力とは距離を置きつつも支持されることは受け入れ、大衆を味方につけて大衆の大陸進出欲にロマンチックなかたちを与えて駆り立てた、と見る（石川 2017:181）。
- (9) 1887 年に成立した米国のドーズ法（インディアンに対する一般土地割り当て法）と、1899 年にできた日本の北海道旧土人保護法とは、共通点が多い。ドーズ法は、狩猟者たる米国のネイティブアメリカン（アメリカ先住民）に土地を与えて農民化し経済面教育面を支援するものである。一方、北海道旧土人保護法も、狩猟者たる北海道のアイヌに土地を与えて農民化し経済面教育面を支援するもので、富田虎男は、後者が前者を参考に行っている可能性、前者

- について知る関係者からの提言が後者の制定に影響している可能性を指摘する(富田 1989)。
- (10) 高天原アルメニア起源説について、小谷部は、木村鷹太郎『世界的研究に基づける日本太古史』下巻、1912(明治45)年の一節「高天原はアーメニアの地」を参照していたのではないかと、吉永進一氏よりご教示を受けた。国立国会図書館デジタルコレクションにある同書36-41頁はたしかに同名の節があり、同内容の詳細な記述があるのを確認できた。ところで、小谷部はエールで人類学も学んでいた。『日本及日本國民之起原』から、ジェイムズ・フレイザーの人類学の大著『金枝篇』のような印象を覚えたことを筆者は書き添えておきたい。

参考文献

小谷部全一郎の著作

Oyabe, Jenichiro 1898 *A Japanese Robinson Crusoe*, Pilgrims Press (生田俊彦訳『ジャパニーズ・ロビンソン・クルーソー』皆美社, 1991年。英語復刻版は一寸社, 1991年)。

小谷部全一郎 1909 『北海道旧土人保護ニ関スル建議: 写』北海道出版企画センター(1981刊)。

小谷部全一郎 1930 『成吉思汗は源義経也 著述の動機と再論』富山房(1924年の『成吉思汗ハ源義経也』に『著述の動機と反論』を増補したもの)。

フレデリック・スタール 1911 『アイヌ謎集』小谷部全一郎編訳, 鶴岡信治刊行。

小谷部全一郎 1929 『日本及日本國民之起原』経国社, 1981年(厚生閣から1929に刊行されたもののリプリント)。

小谷部全一郎 1930 『静御前之生涯』厚生閣。

小谷部全一郎 1933 『満洲と義経』厚生閣書店。

Oyabe, Jenichiro 1934 "The oriental Civilization and Japan," *Israel's Messenger*, 2nd March 1934.

小谷部全一郎 1938 『純日本婦人の倂』厚生閣書肆。

小谷部の著作以外の参照文献

Ashelman, Polly and Dorsey-Gaines, Catherine 2001 "The "Southern Workman": A Resource for Documenting the Development of Early Care and Education in Virginia," in *National Association of African American Studies & National Association of Hispanic and Latino Studies*.

Robinson, Greg and Yaguchi, Yujin 2009 "introduction," in Jenichiro Oyabe, *A Japanese Robinson Crusoe*, University of Hawai'i Press, 1-30.

Hasegawa, Kazumi 2018 "Resurrection of a Premodern Hero: The Debates over the Legends of Minamoto no Yoshitsune in Interwar/1920s-1940s Japan." *Radical History Review*, Issue 130 (2018): 131-156.

Howard University School of Divinity, *The Divinity Magazine, Sesquicentennial Issue*, Spring/Summer 2017, Howard University School of Divinity.

Office of Public Relations, Hampton University No Date (1982?) *Visions of Our Past: Hampton Institute Historic Brochure*, Office of Public Relations, Hampton University.

Suyematz, Kencho 末松謙澄 1879 *The Identity of the Great Conqueror Genghis Khan with the Japanese Hero Yoshitsune: A Historical Thesis*, Collingridge.

アイヌ民族博物館 1987 『アイヌ文化の基礎知識』(財)白老民族文化伝承保存財団。

石川巧 2015 「戦時下のプロパガンダー小谷部全一郎『成吉思汗は義経なり』を読む」立教大学日本学研究所・公開シンポジウム—近代日本における偽史言説 その生成・機能・受容, 2015年11月8日, 立教大学。

石川巧 2017 「戦時下の英雄伝説——小谷部全一郎『成吉思汗は義経なり』(興亜国民版)を読む」『近代日本の偽史言説——歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』, 勉誠出版, 155-185頁。

小川正人 2008 『吉田巖書誌』北海道立アイヌ民族文化研究センター調査研究報告書4。

小川正人 2009 「函館と近代アイヌ教育史—谷地頭のアイヌ学校の歴史から—」キャンパスコンソーシアム函館公開講座記録。

小熊英二 1995 『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社。

帯広市図書館(帯広叢書編集委員会) 1996a 『吉田巖資料集2(原資料編)』帯広市教育委員会。

帯広市図書館(帯広叢書編集委員会) 1996b 『吉田巖資料集2』帯広市教育委員会。

菊池勇夫 1982 「義経「蝦夷征伐」物語の生成と機能——義経入夷伝説批判」『史苑』42, 1・2, 立教大学, 85-101頁。

金田一京助 1925 「英雄不死伝説の見地から」『中央史壇——成吉思汗は源義経にあらず』國史講習会, 10(2), 21-35頁。

國學院大學 1982 『國學院大學百年小史』國學院大學。

國學院大學八十五年史編纂委員会編 1970-1979 『國學院大學八十五年史』[本篇・史料編]国学院大学。

國學院大學校史資料課編 1994 『國學院大学百年史(上・下)』國學院大學。

高橋富雄 1996 『義経伝説——歴史の虚実』中公新書。

田中剛 2009 「成吉思汗廟の創建」, 森時彦編『20世紀中国の社会システム 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告』京都大学人文科学研究所, 113-139頁。

土屋博政 2005 「日本のユニテリアンの盛衰の歴史を語る」『慶応義塾大学日吉紀要 英語英米文学』47, 慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会, 123-190頁。

土井全二郎 2005 『義経伝説をつくった男——義経ジンギスカン説を唱えた奇骨の人・小谷部全一郎伝』光人社。

富田虎男 1989 「北海道旧土人保護法とドーズ法—比較史的研究の試み」『札幌学院大学人文学会紀要』45号。

日本基督教団紅葉坂教会百年史編集委員会 1993 「二代 小谷部全一郎」『日本基督教団 紅葉坂教会百年史 1893年-1993年』日本基督教団紅葉坂教会。

長谷川和美 2005 「ハワード大学最初の日本人留学生——小矢部全一郎」『相模女子大学紀要 A 人文・社会系』69, 33-42頁。

原田信男 2017 『義経伝説と為朝伝説——日本史の北と南』岩波新書。

福島恒雄 1985 「北海道キリスト教史研究に関わって——小谷部全一郎のことども」『基督教学』

20, 30-47 頁。

古川博已・古川哲史 2004 『日本人とアフリカ系アメリカ人——日米関係史におけるその諸相』明石書店。

横浜プロテスタント史研究会編 1992 『横浜キリスト教文化史』有隣堂。

吉田巖 1910 『北海道旧土人教育会 虻田学園報』1-6, 北海道旧土人教育会虻田学園。

吉田巖 1935 「二條公と虻田学園」『心の碑 (いしづみ)』北海出版社。

小谷部全一郎略年譜

西暦	元号	事項
1867	慶応 3	秋田に生まれる。(のち、母の死)。
1874	明治 7	父・善之助、全一郎の養育を依頼し、自己の勉学のため単身で東京へ。
1883	明治 16	裁判官となった父と同居するが、意見の対立により父のもとを去る。
1884	明治 17	アイヌ教育・伝道するパチェラー牧師について聞き、渡米の志を起こす。
1888	明治 21	横浜より渡米。ニューヨーク上陸し、実際の米国人に失望。
1889	明治 22	ハンプトン農工実業学校長のアームストロング氏に迎えられ、氏の仕事を手伝いつつ同校に学ぶ。1890 年受洗。1890 年、ハワード大学ランキン学長のもとで神学を学ぶ。
1894	明治 27	エール大学で神学を学ぶ。
1895	明治 28	エール大学卒業、神学士。ハワイ伝道会社より招待、牧師就任。
1896	明治 29	父、脳溢血で死去。父親のハワイ移住がかなわず、エール大にて再度の学修。
1898	明治 30	ハワード大で修士。エール大で哲学及び人類学専攻。 <i>A Japanese Robinson Crusoe</i> 刊行。1899 年、日本帰国。
1899	明治 32	石川菊代と結婚。
		横浜組合基督教会(現・紅葉坂教会)にて 2 代目牧師。横浜大火。「病氣」で退職。
		北海道旧土人保護法。社団法人北海道旧土人救護会および虻田学園を創立。
1909	明治 42	「北海道旧土人保護に関する建議」提出。
		病いのため虻田学園を辞して東京に移転。
1910	明治 43	有珠山噴火と入学者なきため、虻田学園閉校。
1912	大正元	皇典講究所と國學院大学の講師(～1915(大正 4)年)。
1919	大正 8	調査のため陸軍省の通訳試験を受けて合格し、シベリアのチタへ派遣される。
1922	大正 11	ジョン・デイ、全一郎に米国ユニテリアンミッションの学生伝道依頼をこころみるが、安部磯雄らとの話し合いが難航し、成立せず。
1924	大正 13	『成吉思汗ハ源義経也』を刊行。反論を受け『著述の動機と再論』を増補。
1929	昭和 4	『日本及日本國民之起原』を刊行。
1930	昭和 5	『静御前之生涯』を刊行。
1938	昭和 13	妻・菊代、千葉鴨川にて、結核療養中のところ死去、64 才。
1941	昭和 16	大井元芝町の自宅にて急性心不全のため死去、75 才。